

タイトル：2020年度研究セミナー（第21回）

日時：2020年12月19日（土）～20日（日）

オンライン開催

「中世メッカ・メディナへのウラマーの長期滞在と移住」

大津谷 馨（リエージュ大学 博士課程）

今回、初めてこのセミナーに参加させていただいた。私は日本の大学で修士号を取得後、いったん日本で博士課程に進学したが、数年前にヨーロッパに拠点を移し、現在はベルギーの大学の博士課程に在学している。セミナーに携わる先生方の一部には日本での院生時代から大変お世話になっており、日本の先生方や若手研究者の方々に現在の研究内容を知っていただき、日本の学界とのつながりを保つとともに、母語で発表することで博士論文にかかわる問題点を整理したいという思いで応募させていただいた。

自身の報告では、博士論文の序論にあたる問題設定の部分と、第一章にあたるメッカ・メディナへのウラマーの長期滞在と移住について発表した。質疑応答では、細かい点から用語の使い方や全体の問題設定に関わるものまで、大変貴重なご意見・ご助言を賜った。特に、先行研究の提示方法について批判するものにターゲットを絞って示す方法もあるというご助言や、それと関連して話の中核をどこに置くかをもっと明確に提示すべきだというご意見は今後の課題である。セミナーでは、自分の報告のみならず、他の受講生の方々のご発表や議論からも、大きな刺激をいただいた。また、篠田さんによる博士論文執筆のご経験談は、今後のキャリアパスを考えるうえでも勉強になった。

全体として、このセミナーは、博士論文執筆にとどまらず受講生の研究をより良くし、受講生が研究者として成長するための助言やヒントのいただける場であった。若手研究者育成に重点が置かれ、例えば、研究者としての話し方、コメントの仕方などについても並み居る先生方から直に学べる機会だった。さらに、セミナー当日だけでなく、応募書類や発表資料の準備も、自分の研究を見つめなおす時間として貴重だった。数種類の書類を作成し、発表一時間、質疑応答一時間のセミナーに応募するには相応の気持ちの覚悟が必要であり、半年前の私のように過去の感想文を前に躊躇している方もいらっしゃるのではと想像するが、思い切って応募してみることをおすすめする。

今回は、パンデミックの影響を受けてオンライン開催となったが、その可能性と限界を感じた。利点は、ネット環境さえあればどこからでも参加できることであり、今後もオンライン形式が併用されるならば、国外からの参加もより容易くなるかもしれない。一方、反応が見えづらい、資料の提示方法が難しい、発表時間以外での雑談をしづらいなどの問題もあった。ただこれらは工夫によって改善しうる問題であり、セミナー自体の価値を損なうものではない。最後に、このような例年と大きく異なる状況の中で、セミナーを企画開催してくださった先生方、事務局の皆様にご心から御礼を申し上げる。